

研究主題

社会との関わりをもって自ら学びを深める生徒の育成
～思考の活性化を促す授業の工夫を通して～

大仙市立大曲中学校

1 本研究に係る自校の現状と課題

本校では、学習課題の提示について、生徒の疑問や気付きを生かしながら行うよう取り組んできており、「主体的な学び」の視点では指導の工夫が図られているといえる。しかし、話し合い活動において生徒の考えを広げたり深めたりすることについては、一層の工夫が必要であることが、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査の結果からも明らかになっている。

これまでの研究の中で、生徒が見通しをもって取り組む「主体的な学び」の視点とグループでの話し合いを効果的に機能させた「対話的な学び」の視点からの授業改善については、多様な手立てを工夫しながら取り組んできた。生徒の学ぶ姿からは一定の成果が見られ、それが諸調査の結果にも表れている。しかし、生徒が既得の知識や技能を活用して考えたり、学びによる変容を自覚したりする「深い学び」の視点からの授業改善については、具体的な指導方法が実践されておらず、研究をより一層進める必要があると考える。

2 主な取組内容

(1) 「他者と協働して考えを形成し、自己の考えを広げ深める活動」における指導の工夫

ペアやグループ等の少人数による話し合いと学級全体での話し合いを往還させる際の展開の工夫や教師の働き掛けの工夫に取り組む。

(2) 「知識や技能を活用したり知識等を相互に関連付けたりして深い理解につなげる活動」における指導の工夫

既得の知識や技能の活用が図られる学習展開が可能となるよう、単元の指導計画の構成を工夫する。また、話し合いにおける他者との考えの交流を通して、自分の考えを見直したり再構築したりできる場面を設定することで、深い理解につなげるよう工夫する。

(3) 既得の知識や技能を活用して考えさせたり、生徒に学びの変容を自覚させたりする「深い学び」の視点での具体的な手立ての工夫

教科の本質を踏まえた「深い学び」を生徒の姿で表したカードを教科ごとに作成し、授業改善の視点とする。

(4) 授業研究会の工夫

広く意見交換ができるよう、小集団によるワークショップ形式等を取り入れた研究協議を行う。その際、教科の壁を超えた育てたい資質・能力に照らし合わせて見取った生徒の姿について協議し、教師のどのような手立てが有効であったのかを明らかにしていく。

3 取組の具体

(1) 「秋田の探究型授業」の基本プロセスを機能させた授業づくり

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し、「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「ペア・グループ・学級で話し合う」「学習内容や学習方法を振り返る」の学習過程におけるそれぞれの段階を機能させた「秋田の探究型授業」を展開した。特に「ペア・グループ・学級で話し合う」活動では、学習場面におけるねらいと期待される効果に応じて「ペア」「グループ」「自由交流」などを使い分けた。また、他から学んだことを基に考える場面において、「更に追究し

たいことは何か」「新しく発見したことは何か」などの新たな課題に気付かせるような発問をした。



数学科の授業(自由交流)



理科の授業(マーケティングディスカッション)

(2) 思考の活性化を促し、「深い理解」を実現する単元(題材)づくり

新学習指導要領では、知識の理解の質を高めることが重視されている。そこで、各教科の共通実践事項として、単元(題材)など内容や時間のまとまりを見通して、「深い理解」の実現を目指す授業づくりを行った。特に単元(題材)づくりに当たっては、次の二つの視点を取り入れた。

- ①各教科等の特質に応じた学習過程を通して習得する「知識及び技能」の明確化
- ②知識を他の学習や生活の場面で活用する学習場面の設定

(3) P A D (Passive・Active・Deep) カードによる授業分析・改善

① 「思考の活性化」と「深い学び」

本校の研究のキーワードに「思考の活性化」がある。これは、生徒が主体的で対話的な活動をしていることを、Activeな状態と考え、授業において生徒がPassive(受動)の状態からActive(能動)の状態になることを意味している。生徒がActiveな状態であり、かつ各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせている場面でDeep(深い学び)の状態が多く見られると仮定し、生徒の学ぶ姿から授業改善に取り組んだ。

② P A Dカード

Passive, Active, Deepの状態を各教科ごとに生徒の姿で表し、カードにまとめ、授業分析の指標とした。

③ 授業分析と授業改善

1時間の授業の中で、3～6名の生徒を抽出し、複数の教員がP A Dカードを基に分担して観察し授業分析を行った。また、授業後にそれぞれの生徒に対して「何が分かったか」「何ができるようになったのか」を聞き取り、授業の前後の変容について明らかにした。授業研究会では、この結果について協議し、改善点について教科の壁を超えて全員で共有化を図った。

P A Dカード

Passive

- ・板書を写している。
- ・先生の話聞いて記憶している。
- ・友達の説明や意見を聞いている。
- ・質問や疑問がない。
- ・与えられた課題を解くことで終わっている。
- ・何が分かって何ができるようになったか、まとめたり説明したりするのが難しい。

Active

- ・真剣に課題に向き合い解決に向けて見直しをもって考えている。

P A Dカードの抜粋(数学科)

(4) 授業研究会の工夫

指導案検討会・事前授業・研究授業・授業研究会を通した全員参加型の研究授業を行うとともに教科や校種を超えてお互いの授業を見合ったり、「深い学び」についての合同研修会を開いたりした。特に今年度は、「探究活動等実践モデル校事業」の指定校である県立大曲高等学校の先生にも授業研究会においでいただき、専門的な立場からの助言をいただくことができた。授業研究を通した小・中・高の連携を進めることにつながった。



小・中合同研修会

4 研究の成果

(1) 平成30年度秋田県学習状況調査の結果から

① 学力調査について（県平均との比較）

	国語	社会	数学	理科	英語
1年生	+0.8	+7.0	+3.4	-1.7	+2.0
2年生 (H29)	+0.9 (-1.4)	+14.0 (+10.5)	+2.5 (-1.6)	+2.3 (+1.9)	-1.9 (+1.0)

1年生，2年生ともにおおむね県平均を上回っている。2年生においては，平成29年度の結果と比較して4教科で向上が見られた。

② 生徒質問紙より「当てはまる」と答えた生徒の割合（県平均との比較）

質問項目	1年生	2年生 (H29)
ふだんの授業では，自分の考えを発表する機会があると思う。	+12.4	+3.4(+5.3)
ふだんの授業では，学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思う。	+9.5	+8.5(+3.1)
ふだんの授業では，授業の目標（ねらい・めあて）を立てて取り組んでいると思う。	+10.7	+7.5(+9.5)

「当てはまる」に「どちらかと当てはまる」を加えた合計においても県平均を上回っており，良好な状態であると考えられる。

(2) 校内学習アンケートで「当てはまる」と答えた生徒の割合（7月・12月の比較）

質問項目	1年生	2年生	3年生
授業の中で，ペアやグループになって話し合いをしたり，コミュニケーションをとったりする場面には積極的に参加している。	-2	+5	+2
授業の中で，何のためにペアや小グループになって話し合いをするのかしっかり理解して参加している。	+2	+11	+6
授業の中で，考えが深まったり広がったりしたと感ずることがある。	+1	+9	+4

7月の結果に比べ，ほとんどの項目で向上が見られる。特に「何のためにペアや小グループになって話し合いをするのかしっかり理解して参加している」の項目の伸びが大きい。

5 研究のまとめと次年度の取組

(1) 研究のまとめ

「深い学び」をどのように捉えるのが難しく，教科内，学校全体での共通理解を図ることに時間を費やした。本校がこれまで実践してきた「思考の活性化」と関連付け，各教科で協議していく中で，徐々に「深い学び」の具体的な姿が明らかになり，イメージの共有化が図られてきた。また，PADカードを活用した授業研究会の実施により，生徒の学ぶ姿が具体化された。多様な意見を交流し合うことで，授業での課題がより明確になり焦点化できるようになった。

(2) 次年度へ向けて

生徒の学びの深まりにつながる質の高い学習活動を展開するためには，単元（題材）を通して育成する資質・能力を明確にした授業づくりをしていくことが重要である。そのためには，「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善とともに「カリキュラム・マネジメント」の推進を両輪として進めていくことが重要であると考えられる。そこで，次年度は，育成する資質・能力を明確にしたカリキュラムのデザインづくりを進めていきたい。また，小・中・高による授業改善の視点を共有し，互いの強みを双方向で取り入れた連携をより進めていきたいと考えている。